

秋扇雜考補

——中國と日本——

本稿は、『中國詩文論叢』第二十一集（松浦友久教授追悼記念）（二〇〇二年十二月）所掲の「秋扇雜考」に關連して追補を試みたものである。前稿とあわせてお読みいただければ幸いである。

*

「漢皇 色を重んじて傾國を思ふ」と歌いだされる唐・白居易の「長恨歌」において、

後宮佳麗三千人 後宮の佳麗 三千人

三千寵愛在一身 三千の寵愛 一身に在り

とまで詠ぜられた解語の花、楊貴妃。彼女が唐の第六代皇帝玄宗の恩寵を忝なくする一方で、後宮の中にはただ孤閨に寂しく暮らす麗人たちの姿があった。その數は知れず、唐・范

堀 誠

據の『雲溪友議』卷十には、こうして掖庭で虚しく衰悴していく宮娥にまつわる話が見える。宮娥は落葉に詩を書きつけて御溝の水に流してやった。

舊寵悲秋扇 舊寵 秋扇に悲しみ

新恩寄早春 新恩 早春に寄す

聊題一片葉一作紅葉上 聊か一片の葉に題し

將寄接流人 將に流れに接する人に寄せんとす

かつて賜った恩寵は秋扇のうちに悲しみ思い、新たに忝なくする天恩は喜びあふれる早春に寄せられる。「舊寵」と「新恩」とを對比的に詠むが、落葉の舞う時節にこう詠んだ宮娥はやはり「舊寵」の人であつたらう。かくて落葉にこの詩を題すると同時に、御溝の流れに臨んだ人に寄せて送りますと結ぶ詩篇には、外界との往來の閉ざされた宮中であつて

の悲傷が滲む。「舊寵悲秋扇」の句に自ずから「怨歌行」に見た班婕妤の悲愁が底流することは言うまでもない。⁽¹⁾

『雲溪友議』によれば、この落葉の詩のことを聞いた著作郎の顧況はこの詩に和して次の詩を詠んだという。

愁見鶯啼柳絮飛 愁ひて見る 鶯啼き柳絮飛び

上陽宮女斷腸時 上陽の宮女 腸を斷つ時

君恩不閉東流水 君恩 東流する水を閉ざさず

葉上題詩寄與誰 ^{一作歌詩} 葉上 詩を題して誰に寄せん

承句にいう「上陽」は、洛陽の上陽宮を指す。『新唐書』

卷三十八「地理志」二「河南道」「都畿採訪使」に、「上陽宮は禁苑の東に在り、東は皇城の西南隅に接す。」と見えてい

る。白居易は新樂府「上陽白髮人」の詠作にあつて、「天寶五載（七四六）已後、楊貴妃 寵を専らにし、後宮復た進幸

せらるるもの無し。六宮の美色ある者、輒ち之を別所に退く。上陽は其の一なり。貞元（七八五—八〇五）中 尙ほ存す。」

と自ら注している。しかもその詩篇の冒頭部において、

玄宗末歲初選入 玄宗の末歲 初めて選ばれて入る

入時十六今八十 入りし時 十六 今 六十

と唱っている。十六歳で宮中に入った若き娘も今や六十歳。紅葉に詩を書きつけた宮娥もまたこの上陽宮中の人に異なら

ない。顧況の詠作にいう「斷腸」の語がこの恩寵もなき宮娥たちの辛く寂しい境涯を物語っている。白居易もまた「上陽白髮人」の篇中に、

上陽人 上陽の人

苦最多 苦しみ最も多し

少亦苦 少きにも亦た苦しみ

老亦苦 老ひても亦た苦しむ

少苦老苦兩如何 少苦 老苦 兩つながら如何せん

と詠じたところであつた。さらに『雲溪友議』には、このことが早くも天聽に達し、かくて少なからざる者が禁内から出されたと記述される。

古く漢代の長信宮での班婕妤の生きざまは、後の唐代の上陽宮の宮娥たちの姿に連なり、ひいては廣く宮女一般の悲哀にまで重なるものといつてよい。「舊寵悲秋扇」は、恩寵を失ひ天子の訪れない者たちのやるせない心情を語つて餘りある象徴的な句として重要である。ここに「秋扇」の語は「怨歌行」の故事を秘めた語として、詩語の深みをいや増しに増してきたとも見られる。

*
*

漢・班婕妤の「怨歌行」は、當の中國はもとよりのこと、中國の文化を吸収してきた日本の文學世界においても夙に受容されてきた。いまその一斑を確認すべく例を求めてみれば、まず『和漢朗詠集』卷上「冬」「雪」に載る尊敬の作⁽³⁸⁰⁾に次の句がある。

班女が閨の中の秋の扇の色

楚王が臺の上の夜の琴の聲

班女閨中秋扇色

楚王臺上夜琴聲

「班女」はまさしく班婕妤をいう。この句は部類に明らかのように「雪」を詠じたものであり、出典に關していえば、釋信阿の注といわれる「私注」に「題雪 尊敬」という。尊敬は、橋在列の僧名。天慶七年（九四四）に出家して比叡山に入り、號を尊敬といった。生没年は未詳。『沙門敬公集』『尊敬記』はすでに散逸している。「題雪」なる詩篇の全容は知り得ないが、上句は雪の色を、下句はその雪の風に舞う音を詠じていよう。上句の「色」に關してのみいえば、雪と扇との色彩的な繋がりには、「怨歌行」にいう「皎潔如霜雪」の

秋扇雜考補（堀）

表現に由來してその白色合いをいったものである。しかもその扇は「秋扇」の語をもって表現された。この「秋の扇の色」は悲哀の意味深長な色を帯びているといつてよい。

實のところ『和漢朗詠集』において「秋扇」なる漢語が確認できるのはこの句の一例のみであるが、この他、『和漢朗詠集』には次に示すような班婕妤の「怨歌行」を踏まえた詠作が複数ある。卷上「夏」「納涼」に載る大江匡衡の詠⁽¹⁶²⁾に目を向けたい。

班婕妤が團雪の扇 岸風に代わりて長く忘れぬ

燕の昭王が招涼の珠 沙月に當って自ら得たり

班婕妤團雪之扇 代岸風兮長忘

燕昭王招涼之珠 當沙月兮自得

「班婕妤」の名が直に詠まれている。「團雪の扇」は「怨歌行」中の「皎潔如霜雪」および「團團似明月」、この二句に認められる班婕妤の扇のもつ屬性を「團雪」なる一語に撮要したものであることが明白である。「夏夜守庚申、侍清涼殿、同賦避暑對水石、應製一首并序」の句である。匡衡は一條天皇朝の人で、長和元年（一〇二二）没。

また匡衡とはぼ同じ頃の人である慶滋保胤は、卷下「風」に次の詠⁽⁴⁰⁰⁾を残している。

班姬 扇を裁して誇尙すべし
列士 車を懸けて往還せず

班姬裁扇應誇尙
列士懸車不往還

「班姬」はとりもなおさず班婕妤を指す。この摘句の出典に關しては、「私注」に「清風何處隱 保胤」という。その「清風 何處くにか隱る」との詩題によれば、清風がどこかに吹き隠れたので、班姬は纨素を裁って團雪の扇を作り、かくて天子の恩寵を誇ったろうと詠う。「清風何處隱」は白居易「月夜登閣避暑」の詩句による。⁽⁴⁾保胤は長保四年（一〇〇二）没。

また卷下「山」には、

纨扇抛ち來つて青黛露はる
羅帷卷き却けて翠屏明らかなり

纨扇抛來青黛露
羅帷卷却翠屏明

という後中書王（具平親王）の作⁽⁴⁹⁴⁾が載る。上句にある「纨扇」の語もまた「怨歌行」の「新裁齊纨素」に依るものであらう。

以上のそれぞれが、本朝においても班婕妤の「怨歌行」が

受容されてきた明らかな證據といえる。それらは「怨歌行」中の字句あるいは故事を想起させる詩句をさまざまに有しているが、これら邦人の作に加えて、『和漢朗詠集』卷上「夏」⁽¹⁹⁹⁾には白詩からの摘句が載る。

盛夏に銷えざる雪 年を終ふるまで盡くること無き風
秋を引きて手の裏に生る 月を藏して懷の中に入る

盛夏不銷雪 終年無盡風
引秋生手裏 藏月入懷中

「盛夏不銷雪」にはその扇の色を、「終年無盡風」には年中いつでも得られる風を詠じる。使えば秋を導いて涼しい風が手中に生じ、しまえば圓き月がすっぽり姿を隠すように懷の中に入れてしまう。「不銷雪」「藏月」「入懷中」の字句はいずれもが「怨歌行」に由来する表現である。しかるに、この白詩の典據を調べれば、詩題は「白羽扇」であることが知られる。その五言六聯で構成される詩篇の中から、第三・四聯の都合四句を摘句していたことが明らかになる。

そもそも「白羽扇」には第一聯にこう詠じられていた。

素是自然色 素きは是れ自然の色
圓因裁製功 圓きは裁製の功に因る

「素き」色合いは「自然の色」といい、第三聯の上句には

「銷えざる雪」とも表現された。しかるに、この作に詠出された扇は「執素」を裁って作ったのとは異なる。詠作の対象は白羽扇であり、形状は「圓き」というように團扇であろうが、班婕妤ゆかりの執素の扇とは素材が全く異なることに注意せねばならない。「執素」で作られた合歡扇とは別様の白羽扇に對しても、班婕妤のことが投射された例として珍重すべきである。

しかるに摘句されてしまえば、「扇」の名のもとにあたかも班婕妤の執素の扇の如くに鎮座します。それは摘句のマジックといつてよい。白詩に關しては、前稿に「雨後秋涼」詩の領聯上句「團扇先辭手」に基づく和歌世界の受容のあったことを指摘したところであったが、白詩以外にも『和漢朗詠集』卷下「戀」には、「遊仙窟」で名高い張鷟、字は文成の次の詠作(779)を載せる。

更闌^{なだ}け夜靜かなり 長門闌^{すさ}として開けず

月冷^{すさま}じく風秋なり 團扇杳として共に絶えぬ

更闌夜靜 長門闌而不開

月冷風秋 團扇杳而共絶

上句は、漢・武帝のとき、巫祝に惑った陳皇后が長門宮に幽閉されたことを踏まえ、下句にいう「團扇」は班婕妤が

秋扇雜考補(堀)

「怨歌行」に「團團似明月」と唱った扇を詠じたもので、秋の到来とともに使われることもなく恩情の絶たれたことを詠じている。「秋扇」と相俟って「團扇」の語もまた團圓ならざる悲哀と變轉とを含蓄する。我が國における「團扇先辭手」の和歌の受容と相俟って再確認しておきたい。

ところで、我が國における「怨歌行」受容の跡は、すでに示した『和漢朗詠集』に認め得る例からさらに時代を遡り得る。一つに、淳和天皇の天長四年(八二七)に成立したという『經國集』卷十四には錦彦公の「看宮人翫扇」一首(七言律詩、201)を収載する。

妖姬二八御樓東

華扇添粧翳顏紅

遙似恆娥憑漢月

還疑班子恐秋風

掩鬢影暗寶釵上

隨手泣生羅袖中

寄語陽臺爲雨者

朝朝應入楚王夢

妖姬 二八 御樓の東

華扇 粧に添へて顏紅に翳す

遙かに恆娥の漢月に憑るに似たり

還た班子の秋風を恐るるかと思ふ

鬢を掩ひて影は暗し 寶釵の上

手に隨ひて泣は生ず 羅袖の中

語を陽臺の雨と爲る者に寄す

朝朝 應に楚王の夢に入るべしと

この頷聯の下句にいう「班子」は班婕妤を指し、「恐秋風」は「怨歌行」の「常恐秋節至 涼颯奪炎熱」なる詩句に由来しよう。作者である「錦彦公」は、錦部（錦織部）彦公。津田左右吉は『我が國民思想の研究』第一部「貴族文學の時代」第一篇第四章「文學の概観下 平安朝初期の文學」において、「詩そのものが異國趣味そのまゝである」ことを論じて、「看宮人翫扇」の宮人は「長信宮裡の人であり」と指摘した。本朝における文化模倣の一例として舉例されるが、その扇を翫ぶ宮人は、「長信宮裡の人」となった班婕妤にまごう境遇にあつたらうか。

「妖姬二八」は、二八の十六という妙齡の美女をいう。先行する『文華秀麗集』に所載の巨勢識人「奉和春閨怨」(53)の冒頭には、

妾年妖艷二八時 妾の年 妖艷 二八の時

の句作が存在する。「御樓の東」は、東宮のまします御所を指したもののか。この宮女は、美しい扇（華扇）を化粧した紅の花のごとき容顔に添えて隠している。その風情は、不死薬を盗んで月に奔った「恆娥」（姮娥）の如く、あるいは秋風を恐れた「班子」（班婕妤）かと疑うばかりである。その憂いの影は美しい釵を插した鬢まげを覆いかくすように暗く垂れこ

め、華扇を手にした袖口には、泣なみだが溢れる。高唐の陽臺で朝に雲となり暮れに雨となる巫山の神女に胸の思いを伝えたい。朝にはいつも楚王の夢の中に入るべし、と。

扇は「華扇」の語が出現するのみで、必ずしも班婕妤のそれをただちに想起させるものではない。しかるに、その宮女の容顔を詠じては「班子」が發想される。この「看宮人翫扇」詩にまた『和漢朗詠集』を遡った「怨歌行」受容の確かな痕跡が認められたが、この『經國集』をさらに遡って、嵯峨天皇の弘仁九年（八一八）に成った『文華秀麗集』にまたより古い例を拾うこともできる。

宋の郭茂倩の『樂府詩集』卷四十三「相和歌辭」楚調曲「下」に「班婕妤」「婕妤怨」「長信怨」という樂府題の作が収載されることを前稿に記したが、『文華秀麗集』卷中「艷情」にまた邦人の手になる樂府題の詩作が載る。嵯峨天皇御製の「婕妤怨」一首(58)がそれである。

昭陽辭恩寵 昭陽 恩寵を辭さり

長信獨離居 長信 獨り離居す

團扇含愁詠 團扇 愁うらひを含みて詠うたひ

秋風怨有餘 秋風 怨み餘り有り

閑階人跡絶 閑階 人跡絶え

冷帳月光虛 冷帳 月光虛し

久罷後庭望 久しく罷む 後庭の望み

形將歲時徐 形 歲時と徐ゆるさん

まず首聯に詠出された「昭陽」は昭陽殿（昭陽舎）とも記される）を、「長信」は長信宮をそれぞれに指す。因みに、成帝の恩寵を蒙った班婕妤が住んだのは未央宮の「増成舎」であった。⁽⁶⁾これに對して昭陽殿は、趙飛燕の妹である合徳（昭儀）が成帝から賜った宮殿であるといひ、また飛燕と妹の合徳とが住まった場所であるともいふ。もう一方の長信宮は、皇太后（成帝の母）の住まいであり、班婕妤がその世話をして寂しく暮らした場所でもあった。⁽⁸⁾

首聯上句の「昭陽辭恩寵」は、昭陽殿の趙飛燕や合徳が班婕妤の忝なくする恩寵を奪い去った事實をいひ、その結果として「長信獨離居」、すなわち失寵の班婕妤が自ら望んで長信宮に離れ住むにいたった顛末を詠じている。

かくて班婕妤は、愛しい成帝に捨てられた愁いを含んで合歡の團扇を詩に詠む中、折から吹く秋風は余りある怨みを含んで吹きぬける。移り住んだ長信宮は静まりかえって訪れる人もなく、冷たい帳に月明かりが虚しく射しこむばかりであり、天子のまします後宮に仕える望みは永久に絶たれ、我が

秋扇雜考補（堀）

形骸を歲月の移ろいに任ずとの身の上を詠じる。

扇に注目してみれば、「婕妤怨」には「團扇」の語が「秋風」の語と相俟って機能するが、嵯峨天皇はどんな思いで異國の漢の皇帝が導きだした後宮の愛憎劇を詠出したのであろうか。

『文華秀麗集』には、この嵯峨天皇の御製に和し奉った巨勢識人と桑原腹赤の「奉和婕妤怨」^{(59) (60)}の詠作をも載せているが、この二首には班婕妤ゆかりの扇は詠出されていない。ただ桑原腹赤の「奉和婕妤怨」⁽⁶⁰⁾の領聯には、嵯峨天皇の御製詩冒頭に「昭陽」と「長信」が詠まれたように、こう詠じられていた。

昭陽歌舞盛 昭陽 歌舞 盛んにして

長信綺羅愁 長信 綺羅 愁ふ

「昭陽」と「長信」とを對置して構成し、恩寵を蒙る絶頂の者と、過去の恩寵を胸に秘めて憂愁にくれる者とを對照して敘述する。天子の恩愛を奪った側と奪われた側との明暗は、その舞臺となる女たちの居所を介して象徴的に敘述された。

嵯峨天皇の御製も腹赤の詠も變轉の因果を含んだ對句の内容構成をとるが、「昭陽」と「長信」との語は舊く漢時の名だたる女性の歴史を秘めた詩語として機能するのであり、それ

だけに含蓄に富むし、使用例も少なくない。

『文華秀麗集』にまた一例を求めれば、同じく桑原腹赤の「和滋内史秋月歌」⁽¹³⁸⁾に、

長信深宮圓似扇 長信の深宮 圓きこと扇に似て

昭陽秘殿淨如練 昭陽の秘殿 淨きこと練の如し

の句を見る。これは秋月を詠じる中で、上句は長信宮にかか
る扇の如くに圓い月の形狀を、また下句は昭陽殿に降り注ぐ
月の清淨なる色を詠じたものである。⁽¹³⁹⁾因みに、上句は月を詠
じて、その形容に班婕妤の扇を借り用いたことが明らかであ
るが、この詩の直前の嵯峨天皇の御製「和內史貞主秋月歌」
⁽¹³⁷⁾にまた次の句を見る。

皎潔秋悲班女扇 皎潔なり秋に悲しむ班女の扇

これも月を詠じてその皎潔なる色を班婕妤の扇にたとえた作
に他ならない。

もちろん中國の詩篇にも、昭陽殿と長信宮とを詠みこんだ
作のあることはいうまでもない。

班婕妤の悲哀を象徴する長信宮は、一つの歴史的な悲劇の
舞臺にはかならない。それは長樂宮に在って、宮内の西に位

置したことから、「西宮」とも別稱された。⁽¹⁴⁰⁾唐の王昌齡は、
この班婕妤の悲劇の舞臺を複数の詩篇にとらえている。「西
宮春怨」「西宮秋怨」「長信宮詞五首」の詠作がそれである。
その中で「西宮春怨」に注目してみたい。

西宮夜靜百花香 西宮 夜靜かにして 百花香し

欲捲珠簾春恨長 珠簾を捲かんと欲して 春恨長し

斜抱雲和深見月 斜めに雲和を抱きて 深く月を見れば

朦朧樹色隱昭陽 朦朧たる樹色 昭陽を隠す

冒頭と最末尾に「西宮」と「昭陽」の語が對置せられた詩
篇の結構の中に、陰の存在と化して浮かばれることのない班
婕妤の境遇が明瞭に描き出される。百花の香る靜まりかえっ
た夜、珠の簾を捲こうとすれば、春秋の長き恨みが湧きおこ
る。雲和なる樂器（琴瑟あるいは琵琶⁽¹⁴¹⁾）を斜めに抱いて明月を
ジッと見やれば、視線の先には朦朧とした樹々の色が色濃く
立ちふさがり、華やいだ昭陽殿をすっかり隠している。

まさに「西宮」と「昭陽」は、成帝の恩寵を蒙った女たち
の陰と陽とを象徴する語ともなっているよう。「西宮」は木々
に隔世された靜謐な一種の異空間でもある。朦朧たる色合い
の樹木が境界となつて、華やいだ現世的な「昭陽」と隔絶し
た世界を形成している。⁽¹⁴²⁾

この「西宮春怨」には班婕妤ゆかりの扇はまったく姿を見せないが、これに對して「西宮秋怨」にはこう詠まれる。

芙蓉不及美人妝 芙蓉 美人の妝ひに及ばず

水殿風來珠翠香 水殿 風來りて珠翠香し

卻恨含情掩秋扇 卻作補分音補 恨む 情を含みて秋扇を掩ひ

空懸明月待君王 空しく明月を懸けて君王を待つを

芙蓉の花とて装いを凝らした班婕妤の美しさには及びもつかない。水邊の樓閣には秋の涼風が吹きわたり、眞珠や翡翠の髪飾りが芳しく匂う。來まさぬ皇帝への情を秘めて「秋の扇」をしまい込み、明月がひっそりと照らす中、かなわぬことと思ひながら君王のお出ましを待つのが恨めしい。

因みに、「明月」は「團團似明月」なる「怨歌行」の詩句にも認められた字句であり、かつ漢・司馬相如の「長門賦」に「明月懸かりて以て自ら照らし、清夜に洞房に徂く」とあるのを踏まえる。「長門賦」は、漢の武帝の寵を失い獨り寂しく暮らした陳皇后が相如に作らせたという作。まさに夜の闇を皎々と照らす明月が、皇帝をわが洞房にかりたて導かんとするのでもあろう。圓き明月の形状はまた鏡にも通じる。

「懸」字はこうした鏡に比況して用いられたか。

「恨」は、物ごとの解決不可能性・回復不可能性への自覺

秋扇雜考補（堀）

に基づく無念さ・悔恨をいうとの説がある⁽¹⁵⁾。秋扇を手にする姿は、冬扇となる身の上を自覺しつつも、あてもなき天子の訪れを諦めきれない哀愁が滲む。「君の懷袖に出入」すべき扇も「涼颯 炎熱を奪ふ」時節の到來を受け入れざるを得ない苦衷は計り知れない。

男を待ちに待つ女の姿は痛々しく、時節を逸した秋扇こそ恨めしい。我が國には、「扇ゆゆし」ということばがあった。辭典類によれば、班婕妤の「怨歌行」の故事から、扇が男女の仲にとって不吉であるとの意にいう。貞元・天元（九七六―九八二）の頃の成立と見られる『古今和歌六帖』卷五に次の和歌が見える。

名にし負はば頼みぬべきをなぞもかもかく

あふぎゆゆしと名づけそめけん

「あふぎ（扇）」は「あふ（逢ふ）」に通じるので、餞別に贈ることが多かったという。しかるに、その「名にし負」うこともなく、再會の頼みにならぬことが少なくともあったのである。あるいは男女が相逢うこと、果ては戀の成就とその行く末の全きとを念願する者たちにとって、班婕妤ゆかりの

悲戀の扇のイメージは、戀の道を阻むもの、全うせしめぬものとさえ嫌忌する微妙な心理的反應をも生んだ。かくて扇自體をタブー視するにいたったものでもあらう。この歌自體がそのことばの生まれた背景と人々が抱いた思いとを端的に示している。まさしく色戀の道に關わる日本の習俗の降誕といつてよい。

『後撰和歌集』卷十三「戀五」に載るところの、
人をのみうらむるよりは

心からこれ忌まざりし罪と思はん

との「よみ人しらず」の和歌には、次のような詞書がある。

男の心變る氣色なりければ、たゞなりける時、この男の
心ざせりける扇に書きつけて侍りける

心變わりした氣配の見た男に贈りとどけられた扇。その扇は、「この男の心ざせりける扇」、すなわち男が前々から欲しがっていた代物であった。そこに書きつけた和歌に「これ忌まざりし罪と思はん」というのによれば、女はこれまで「飽き」の時節の到來をとりたてて忌まずにきたのであらう。それをいま和歌とともに贈りつけたところに大きな意味がある。結局受け取った男の「心變る氣色」が回復されたのかは知る由もないが、この和歌が「扇ゆゆし」の習俗に裏打ちさ

れることは明々白々である。

また『大和物語』の第九十一段「扇の香」にも、三條の右大臣（藤原定方）が、中將の頃に賀茂の祭の敕使に立った折、以前通っていた女のもとに「扇もたるべかりけるを、さわがしうしてなむ忘れにける。ひとつたまへ」と言つてやったところ、色も香もよい扇をとどけてよこした。その折、扇の裏の端のほうに書きつけられていたのが次の歌であった。

ゆゆしとて忌むとも今はかひもあらじ

憂きをばこれに思ひ寄せてむ

扇を「ゆゆしとて忌む」習俗が端的に現れている。これまで男に贈ることを忌んできたにも關わらず、女はいま男の急な所望を容れて扇を送りとどけると同時に、その辛い思いを寄せて送つてやった。因みに、女の歌は『拾遺和歌集』「雜戀」には、「女のもとに扇を遣はしたりければいひつかはしける」との詞書で、また四・五句は「うきをば風につけて止みなむ」となつて載るが、それはそれとして、この和歌を目にした男は、「いとあはれとおぼし」て次の返し（返歌）を詠っている。

ゆゆしとて忌みけるものを

わが爲になしといはぬは誰がたつらきなり

扇を「ゆゆしとて忌みけるもの」とは、これまた「扇ゆゆし」をいったものである。そうした扇を女が無いといわずに送り届けてきたことをとらえて、男は、いったい辛い思いは誰が味わっているのかと切り返した。⁽¹⁶⁾

「扇ゆゆし」の習俗はかくも往時の生活に深く溶けこんで、廣くに浸透していたことが明らかである。こうした身近な習俗の誕生は、中國には無かった展開といえるようである。それだけに、班婕妤の「怨歌行」に關わる極め附きの日本的受容相として特筆すべきものであると考える。

*** **

前漢の成帝の寵姫でありながら、宮中に趙飛燕さらにはその妹の趙昭儀（合德）が召されてのちに恩寵を失い、やがて後宮の長信宮にすむ皇太后（成帝の母）に仕えて寂しく暮らすことになった班婕妤。「秋扇」の語が、その身の上の變轉を含蓄することはいうまでもない。唐・劉禹錫の「秋扇詞」は、こうしたはかない「秋扇」そのものをテーマに詠じた作である。

莫道恩情無重來

恩情の重ねて來ること無きを道ふ莫かれ

秋扇雜考補（堀）

人間榮謝遞相催 人間の榮謝 遞じかひに相催す

當時初入君懷袖 當時初めて君の懷袖に入りしとき

豈念寒爐有死灰 豈に寒爐に死灰あるを念はんや

起・承の兩句において、世間的な榮耀と衰退は交互に起こるものだから、天子の恩情を再び身に受けることのない現實は言うに當たらない、という。轉句にいう「入君懷袖」は班婕妤「怨歌行」にある「出入君懷袖」の字句に依ったもので、かつてあなたにお使いいただいた往時を回想的に詠ったものである。それは確かに「秋扇」自體を詠じていながら、結句には「夏爐冬扇」の熟語にも對照された「爐」をとらえる。「寒爐」は冬場に限らず火の氣が失せて冷え切った爐を、「死灰」は燃え切った白い灰をいう。その「寒爐有死灰」の表現は、圓滿なりし情愛の、その變轉の行きつく先を極言したものと見える。「秋扇」を詠じながら「寒爐」を借りて身の變容を表現した發想は奇抜ではないか。その思わぬ展開の妙が讀み手を引きつけてやまないが、この劉禹錫の詠作の如く、詩題そのものに「秋扇」の語が認められる詩篇は極めて稀である。『全唐詩』には、他に鄭谷の「代秋扇詞」の作を認めるのみである。しかし、鄭谷の作には「怨歌行」に由來するが如き字句は全く認められない。その意味でも劉禹錫の

「秋扇詞」は珍重すべき詠作といふことができる。

因みに、「秋扇」に關連する「冬扇」と「夏扇」の語についていえば、日本においては、檜扇（檜や杉などの五枚から八枚の薄い板を綴じあわせたもの）を「冬扇」（十月から三月）、^{かほり}編蝠扇（竹・鐵などの數本の骨に紙や絹を貼つたもの）を「夏扇」（四月から九月）とも呼んで用い、宮中における服飾の具ともなっていたことを加えておきたい。

ことばは時代と根附いた土地の環境の中で育まれていく。一つに班婕妤の「怨歌行」は中國と日本の文學風土の中でそれぞれに受容され、それをまた源泉ともして「秋扇」や「團扇」の語と相俟って多様な受容相を創り出してきた。その種々相はことばの鑛脈の、ごく一部を採掘し得たものにすぎないかもしれない。しかし、それぞれに新鮮な息吹が感じられ、そこにことばの水琴窟を聴いたが如き、ことばの活きた面白さが潜んでいる。

〔注〕

- (1) この話は唐・孟榮『本事詩』にも載るが、宮娥の詠んだ冒頭の詩は出ていない。『太平廣記』には、この「願況」（卷一九八、「出本事詩」）の他、卷一九八に「盧渥」（「出雲溪友議」）

卷三五四に「李茵」（「出北夢瑣言」）という類話を載せる。

また、宋・劉斧の『青瑣高議』には張實の「流紅記」を載せる。こうした一類の話は日本でも早くに受容されたようで、『今昔物語集』卷一十三に「震旦吳招孝、見流詩戀其主語第八」が載るが、出典を特定することはできない。

- (2) 班婕妤の扇と楚王の琴とを對した句作としては、唐・李嶠「遊禁苑陪幸臨渭亭遇雪應制」の頸聯に「光含班女扇、韻入楚王弦」の例がある。

- (3) 『本朝文粹』卷八、『江吏部集』上。『江談抄』第六「長句事」にも引かれる。

- (4) 『江談抄』第四にも引かれる。

- (5) 白居易の「上陽白髮人」に見えるところの「入時十六」の年齢にも相通じるものであろう。小島憲之『國風暗黒時代の文學』下Ⅲの「經國集詩注」(二〇一番)には、「妖姬二八」を十六人の舞姬の意に解する。「二八」には古の「女樂二八」、二列十六人の舞樂の意もあるが、ここではその解釋に與しない。

- (6) 『漢書』卷九十七下「外戚傳」の「孝成班婕妤傳」に、「孝成班婕妤（略）爲婕妤、居增成舍。」とあり、應劭は「後宮有八區、增成第三也。」と注する。また『三輔黃圖』卷三にも、「班婕妤居增成舍。後宮八區、增成第三區也。」と見える。

- (7) 『漢書』卷九十七下「外戚傳」の「孝成趙皇后傳」に、「皇

- 后既立、後寵少衰、而弟絕幸、爲昭儀。居昭陽舍（略）。とある。また『三輔黃圖』卷三には、「成帝趙皇后居昭陽殿。有女弟俱爲婕妤、貴傾後宮。」とある。
- (8) 『三輔黃圖』卷三に、「長信宮、漢太后常居之。按通靈記、太后、成帝母也。后宮在西。秋之象也。秋主信。故宮殿皆以長信長秋爲名。」とある。
- (9) 「辭」の解釋については、「日本古典文學大系」本の「○昭陽」の頭注に、「主君の恩愛を失つて昭陽殿（班婕妤が住んでいた殿舎の名）を辭去し、長信宮（成帝の母王太后の居た宮の名）にひとり別れて住むことになった。」と譯出するが、その「昭陽殿」に付された注記は事實を誤認するが如くである。ただし、同書の桑原腹赤「奉和婕妤怨」の頷聯に對する「○昭陽」の頭注では、注(10)に示すように誤認がないようである。
- (10) 「日本古典文學大系」本の「○昭陽」の頭注に、「(いま天子の恩寵をひと手に引受けている趙飛燕のいる)昭陽殿では歌謠舞樂が盛んに起るが、(獨り居の)長信宮ではきぬ(あや絹とうす絹)を着た婕妤が憂愁にとざされている。」とある。
- (11) 『經國集』所載の「奉和婕妤怨」に續く桑原腹赤の「奉和聽擣衣」の尾聯下句にまた「應通長信復昭陽」の句がある。
- (12) 注8を参照されたい。
- (13) 「雲和」については、高橋良行〈王昌齡「西宮春怨」詩札記〉「斜抱雲和深見月」の解釋をめぐって——『中國詩文論叢』第六集、一九八七年六月)が、琴瑟である可能性を指摘している。
- (14) 因みに、昭陽殿は、唐詩の中で、杜甫「哀江頭」の詩中に、昭陽殿裏第一人 昭陽殿裏 第一の人
李白「宮中行樂詞」其二に、
宮中誰第一 宮中 誰か第一なる
飛燕在昭陽 飛燕 昭陽に在り
と詠じた例を拾い得る。兩詩いずれもこの前漢の歴史を借りるとともに、玄宗の寵姫、楊貴妃を詠じている。往昔の史傳を借りた詩的世界の中で、「昭陽」はまた際立った意味をもつといつてよい。
- (15) 松浦友久「詩語としての「怨」と「恨」——闌怨詩を中心に——」(『詩語の諸相——唐詩ノート』、一九八一年四月、研文出版)。
王昌齡の「西宮春怨」あるいは「西宮秋怨」の場合、彼女の置かれている情況自體を「春の日の満たされぬ思い」あるいは「秋の日の満たされぬ思い」として捉えた總體的な情況設定であるといひ、「西宮春怨」の承句「欲捲朱簾春恨長」に見る「春恨」、あるいは「西宮秋怨」の轉句「却恨含情掩秋扇」に見る「却恨」は、上記の情況下における何らかの悔恨の情と關わる個別的な情況設定であると指摘している。因み

中國詩文論叢 第二十三集

に、「怨」が（物ごとの）實現可能性が自覺されながら、それが實現されないことに基づく不満・憤懣であるのに對して、「恨」は（物ごとの）解決不可能性・回復不可能性への自覺に基づく無念さ・悔恨を表すという。

(16) 『後撰和歌集』以下の資料については藤原克己氏にご教示いただいたことを感謝とともに記しておく。

(17) 日中の扇に關わる最近の論考として、王勇〈日本扇の起源と中國における傳播〉（王敏編著『意〉の文化と〈情〉の文化―中國における日本研究―』、二〇〇四年十月、中央公論新社刊）があることを記しておく。